

## 火と土

並木 せつ子

人の生活と深く関りがありながら、身近に感じられなくなったもの、それは「火」と「土」ではないだろうか。子どものころ、私の家では薪で風呂をたてていた。薪をくべながら火の番をするのだが、風呂の傍に居るのは、そのためだけではなく、オレンジ色にゆらめく炎には、ずっと見ていたいと思わせるような不思議な力があった。今ではできなくなった焚火も、火が消えないよう大きくなりすぎないよう、気をつけながら炎を見ているのは、まだ煮炊きや暖をとるのに火を使っていた時代だったのに、とても幸せな時間だった。

長い間、生活の中に火があるのは普通のことだったが、まず照明から火の姿は無くなり、今や風呂の湯を沸かすのも、料理をするのもボタン一つですむようになった。マッチが擦れる子どもは少数派(※)だというのもっともな話である。大人だって生活の中で火をおこすことや、オレンジ色の炎を見ることはあまり無い。

こうした状況を案じて、『火と炭の絵本 火おこし編』(農文協 2006年)の著者・杉浦銀治は、「火遊びのすすめ」という活動を全国で行っているという。本の中で「できるだけ子どもたちに火を体験させてあげてください」と訴えている。「火」の本も、科学の本やアウトドア、火の歴史、火災の防ぎ方という内容だけではすまなくなった。

もう一つ身近でなくなったのは「土」。霜柱がたつを見たのは、いつが最後だったろう？ 雨上がりの土に春の匂いを感じられなくなったのは、いつ頃からだろう？ あたりまえだと思っていたものが、ふと気がついたら無くなっていった。店にならぶ野菜——大根や人参や青菜などは、土の中にはえていたと

は思えないくらいきれいだ。

最近建築された住宅は、敷地がすべてコンクリートで覆われていたり、砂利が敷き詰められていたり、土がむき出しになった地面はほとんど無い。たぶん霜柱を踏む楽しさや、そのあとの泥靴の煩わしさを知っている子どもも、マッチと同様に少数派かもしれない。“泥んこになる”イベントがあるというが、イベントを開催しなければならないくらい、普段は土と無縁ということだろう。

こうした穴を埋めるように、「土」の本が続々と出版されている。『土の総合学習シリーズ』(あかね書房 2003年)、『土のひみつをさがしてみよう』(フレーベル館 2002年)、『大地のめぐみ土の力大作戦』(小峰書店 2003年) などなど。かつてのように、無機質な土や、公害という観点から見た土ではなく、作物が育つ盤土としての土である。それに関連した「農」や「米」などの本の多さにも、目をみはるものがある。『お米ができるまで』(講談社 2015年)、『お米からそだてるおにぎり』(偕成社 2015年)、『稲と日本人』(福音館書店 2015年) など、児童室でも目をひく存在となっている。(ちなみに1927年刊『キンダーブック』創刊号も「お米の巻」だった)。

1969年生まれの益田ミリは『おとな小学生』(ポプラ社 2013年)に、泥だんご作りに夢中になった子ども時代の思い出を書いている。「土の感触、土の匂い、土の重さ。大人の大きな手になった今でも、手のひらが覚えている」という。体感する機会の無い事柄は、本やイベントで知るしかないが、「火」にしても「土」にしても、本当の美しさやありがたさ、怖さや煩わしさまでは伝わらない。昔がよかったとは言わないけれど、もうこれ以上は……。便利さも清潔さも、私はほどほどがよい。

(なみき せつこ)

※『「家事のしずぎ」が日本を滅ぼす』佐光紀子著  
光文社 2017年

## 世界の絵本の図書館 いたばしポローニャ子ども絵本館

東京都板橋区とイタリアのポローニャ市との交流が、板橋区に特色ある図書館を育てています。その図書館のはじまりから、近い未来の姿までご紹介します。

浅妻 とも子

いたばしポローニャ子ども絵本館は、世界100か国、2万6千冊、70言語の絵本を所蔵する板橋区（東京都）にある図書館です。個人への貸出はなく館内でご覧いただいています。

初めていらした方には、よく、なぜ海外絵本の図書館を作ったのか、どうやってこんなにたくさんの海外絵本を集めたのかと聞かれます。絵本は、毎年春に北イタリアのポローニャで開催される、児童書専門の国際見本市「ポローニャ児童図書展（Bologna Children's Book Fair）」の事務局から寄贈していただいています。板橋区とポローニャ市の交流の始まりは、1981年に板橋区立美術館で開催された「イタリア・ポローニャ国際絵本原画展」でした。以後、原画展は毎年開催され、そのご縁から板橋区に絵本も寄贈していただくことになったのです。

初めてポローニャから絵本が届いたのは、1993年でした。それから毎年贈っていただいています。届く絵本は、各国の出版社が、ポローニャラガッツィ賞にエントリーした本です。ポローニャラガッツィ賞とは、ブックデザインの優れたものに贈られる賞で、各社は過去3年以内に出版した本の中から送ることにしています。板橋に届く本の中には、入賞作品が含まれている場合もあり、思わずため息の出るような美しい絵本に出会うこともあります。

### 世界の絵本をお披露目

この届いたばかりの世界の絵本を皆さんにご覧いただく絵本展が「ポローニャ・ブックフェア in いたばし」です。初めてのブックフェアは多くの子どもに見てもらえるよう、学校

の夏休み期間に合わせて、東武東上線成増駅前にある定員470名の成増アクトホールで開催しました。外国語のわからない方も絵を見て存分に楽しんだり、読める方はじっくりお読みいただいたりと、それぞれ自由に楽しんでいただくことができました。

そして、この時はまだ、いたばしポローニャ子ども絵本館は設置されておらず、寄贈された絵本を管理していたのは、板橋区役所の区民部商工課でした。絵本を担当する部署は図書館か教育委員会ではないのかと驚かれるかもしれませんが、国際見本市との関連と考えればなるほどとあっていただけでしょうか。商工課主催の絵本のイベントでは、書店による児童書の販売も行なわれていました。

### 名物イベントと図書館はこうして誕生しました

そして2回目に絵本が届いた1994年、海を渡ってきた絵本から区民の国際理解につながるようなイベントを企画しようと商工課で考えたのが絵本の翻訳コンテストです。届いた絵本の中から英語の絵本を1冊選び、それを課題として翻訳を募集したところ、国内外から1,514作品の応募がありました。「いたばし国際絵本翻訳大賞」のはじまりです。審査は、翻訳家の先生方をお願いし、大賞受賞の方には賞金の他、副賞としてイタリア行きの航空券も贈られました。

翌年は、英語部門とイタリア語部門を設け、その後、担当部署が商工課から国際交流課、図書館へと移りました。2004年9月には、閉校した小学校の一部を改装した「いたばしポローニャ子ども絵本館」をブックフェアも翻訳大賞も、ポローニャから届く絵本のな

にもかもが集まる図書館として開館しました。

それまでは、寄贈された絵本を見



られるのは、ブックフェア期間のみでしたが、いたばしポローニャ子ども絵本館の開館により、いつでも世界の絵本を手にとることができるようになりました。過去の翻訳大賞の入賞作品も見ることができます。決して最適なスペースとは言えないけれど、絵本を倉庫にしまうのではなく、いつでも見ていただけることを優先して、この一部屋に辿り着いたのです。まずは、蔵書を検索する術もないままオープン、やがて単館目録が作られ、今では区立図書館の目録と統合しインターネットでも検索できるようになりました。まだ、データの不足や誤りがあるため、正しく検索してもヒットしないこともあったりするのですが地道な修正を続けています。まるで作りかけのまま開館してしまったように見えるかもしれませんが、絵本を公開することを最優先に今日まで至っています。

### 翻訳大賞は 24 回目を実施中

翻訳大賞は、年に一度で続けられ、現在 24 回目を実施中です。8 月下旬に課題を発表し 11 月末の締め切りまでの 3 か月で英語部門 798 点、イタリア語部門 244 点の応募がありました。これほど多くの大人が同時期に同じ絵本に向き合って何度も読み返すことは、なかなかないことだと思います。

「どういう言葉を使えば子どもたちに伝えられるのかとても悩みました。大変だったけれど楽しかったです。」このような内容の感想をいくつも頂戴しました。もとの絵本を十分に味わい、それを読者に伝えるために考え抜かれた作品は、一次、二次審査を経



て、入賞作決定となります。審査の先生方も入賞作を決める時には、何度も声に出して読まれるそうです。そして、いよいよ 2 月下旬に結果発表です。いたばしポローニャ子ども絵本館のホームページに入賞された方のお名前と審査員からの全体の講評を掲載しますのでぜひご覧ください。

### これからも、そして 3 年後には

海外の著作物を利用したコンテストの実施には、いろいろな困難もありますが、各方面からご協力いただき継続してきました。第 14 回以降の入賞作品は、翻訳絵本としての出版も叶いました。副賞の航空券はなくなりましたが、ブックフェアと翻訳大賞は続きます。

いたばしポローニャ子ども絵本館は、3 年後に新築移転を予定している新中央図書館へ併設することになりました。小さなお子さんもゆっくり過ごせるように、大人の方がゆったり絵本を楽しめるように、そして世界につながる小さなきっかけになるようにと、試行錯誤しながら準備を進めているところです。これまではやむを得ず背の高い棚にぎっしり入れてきた絵本が、ゆったりと並ぶまで、あと 3 年です。それまでは、今しばらく、狭い館内を譲り合ってください。

板橋区には、1990 年頃からの海外絵本を所蔵する、いたばしポローニャ子ども絵本館があります。いつかお役に立てれば幸いです。(あさづま ともこ：板橋区立いたばしポローニャ子ども絵本館)

[http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c\\_kurashi/002/002177.html](http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/002/002177.html)